

## ■淫乱ミコトちゃんの敗北

——備淫ウイルスにより、淫乱と化したミコト。

肉便器として犯されるだけに飽きたらず、セックスに自信のある男子にバトルファックを挑み、返り討ちにする日々を送っていた。そんな日々を送るうち、性戯と絶倫さが凄まじいという男子の噂を耳にしたミコト。早速その男子にも勝負を挑んだのであった——

「ふうん、あなたが噂の絶倫チンポさんね♥ どんなチンポ？ アタシにやらせてみない？」

【いいけど……いきなりはムリだと思うなあ】

「ムリだなんて決めつけないでよ。それに、いきなりだなんて レスキュー現場では当たり前 でしょ♥」

【まあ、そういうなら……】

「ふふ……ぶっといおちんぼさん、かもーん♥」

舌なめずりし、外観に見合わせぬ色気を醸し出すミコト。

だがその余裕の表情が、すぐさま一転する。

(……ちょ、ちょっと待って……なによ、コレ……？！)

こんなにエグいなんて、聞いてない……！)

見せられた肉棒は、今まで味わった数々のものよりも迫力と精力に満ち満ちていた。

サイズのみならず、反り上がった角度、見てわかる硬さと弾力、カリの高さ……あらゆる点が理想とされる、まさに女殺しの絶倫巨根であった。

【驚いてるみたいだけど……どうする？ほんとにやるの？】

「っ……やるに決まってるじゃない！ ドライブヘッド隊員をなめないで！

そんなもの、大きいだけでたいしたことないわ！ さぁ行くわよ！」

見ただけで子宮が疼くほどの肉幹。しかし戦わずして去るのはプライドが許さない。

バトルファックを互いに了承するや、ミコトは素早く押し倒して騎乗位挿入をしかける。

(一気に決めるわよ……あんなのに好き勝手されたら、とてもこっちのオマンコが保たない……！)

前戯をさせず、挿入……膣の締め付けで早期決戦を試みるミコト。

自らも陰部を露出させ、鈴口を割れ目に宛がい……

【いきなり挿入？ どうなっても知らないよ？】

「それはこっちのセリフよ！ アタシのオマンコの威力で、即落ちさせてあげるんだから……！

こんな、ただで発情しちゃう絶倫おちんぼなんか……」

——負けたりしない！！

ずぼおっ♥

「あっへえええええええええええええええっ♥♥♥」

自分が主導権を奪い、自分のペースで腰を落としての挿入。

激しく勢いをつけた肉棒抜きで、相手を墮とすはずだったが……

あろうことか、嬌声を上げたのはミコトの方だった。

自信に満ちた表情が一瞬にしてアへ顔に変貌し、結合部から牝潮を噴いて絶頂を見せ付けてしまう。

(ウソ……♥♥ たった一突きで♥♥ イカされ……♥♥)

【え、大口叩いておいて そっちが即落ちしたの？ なんだ、ドライブヘッドのヤリマンも大したことないんだね】

「っ♥♥ 今のは……ただのサービスよ♥♥ 見てなさい♥♥ ここから…… あ ひ いっ ♥♥」

反撃に出ようと腰を上げるが、その際 カリによって肉襞を引っかかる。

攻撃のために僅かに動いただけで凄まじい快楽を与えられ、ミコトは再び絶頂しそうになり反撃どころか腰を震わせる。

【何もしてないのに勝手にアへらないでほしいんだけど……せめてマジメにヤッてほしいなあ】

「あ、アへってらい♥♥ あなたこそ♥♥ こんな……ぶとくて♥♥ ガチガチで♥♥  
気持ち良いだけのおちんぼ♥♥ やせがまんしてないで♥♥ 早く……出しなさいっ♥♥」

絶頂をどうにか堪え、ゆっくりと腰を使う。

だがやはり動けば動くほどミコトが追い詰められ、対して男子はミコトの腰使いがまるで効いていないのか平気な顔のままだ。

(悔しいけど……こいつのおちんぼ♥♥ 気持ち良すぎるっ♥♥  
気を抜いたら一瞬でオチちゃう……♥♥ どうにかして、突破口を……)

ごっんっ♥♥

「おほおおっ♥♥♥」

腰を振りながら策を練るが、そこで男子が攻撃。一気に突き上げられ、容易く最奥まで抉られて子宮が撃ち抜かれる。脳髓を揺さぶるような強烈な一撃に、ミコトはあっさりと二度目の絶頂に達していた。

【またイッたの？ 悪いけど、全然勝負にならないよ……出直してきたら？】

「なめないでって言ったれしょ♥♥ あなたこそ♥♥ そろそろイキそうなんでしょっ♥♥  
早くっ♥♥ 早くイキなしゃいよっ♥♥」

【じゃあ遠慮なく】

呂律が回らなくなりながら、口だけは負けぬよう競り合う。

しかし遂に男子が本格的に攻勢に出る。ミコトの太股を掴んで引き寄せ、更に深く結合させて子宮を押し上げる。

「ひっ♥♥ 深く……」

ごっんっ♥♥ ごっごっごっごっごっ♥♥

「おうをほっ♥♥ 奥っ♥♥ 子宮がっ♥♥ 潰されええっ♥♥ イッイグッ♥♥ ちがっ♥♥  
あへっ♥♥ イガないっ♥♥ イガないいいいいいい♥♥」

更にピストンで子宮を連打される。

軽い絶頂を連続で叩き込まれ、ミコトは半狂乱になって絶頂を否定するしかできない。

(すっスゴすぎるっ♥♥ イクのが止まらない♥♥ アタシが♥♥ こんなに簡単に追い詰められるなんてっ♥♥  
早く出させないと♥♥ このおちんぼの肉便器になっちゃううっ♥♥)

もはや自分からはどうにもできず、相手の射精を待つのみ。

しかしどう見ても相手は絶倫。早漏などありえないが……心の中での懇願が届いたか、早くも射精しようとしていた。

【出してほしいみたいだし、遠慮なく中出しさせてもらうね。

こんな随ちまくりの子宮だと ほぼ確実に受精すると思うけど、ミコトちゃんの望んだことだからいいよね？】

「ふひっ♥♥ なによっ♥♥ もう音を上げるのねっ♥♥ くっ♥♥ 口ほどにもない♥♥  
ただ大きくて♥♥ 気持ち良すぎるだけの♥♥ ただのおちんぼじゃないっ♥♥  
いいわよ、出しなさい♥♥ 孕ませるつもりで出して♥♥ じゃないと♥♥ 愉しめないからあっ♥♥」

否定せず、むしろ自分から中出しを希望するミコト。もちろん、これが最も男子に効果的だからだ。

そして孕ませられるのを望んでいる口ぶりだが……当然、避妊の準備もしてある。

ミコトは度重なる孕ませ快樂地獄を味わった。もうこれ以上の孕ませ地獄を防ぐため、避妊リングを使用しているのだ。

(避妊リングがある限り♥♥ アタシが孕むことなんてありえないんだから♥♥  
もし避妊リングがなかったら、受精確実♥♥ 間違いなく妊娠させる絶倫種漬けで♥♥  
せいぜい……勝ち誇ってなさいっ♥♥)

ずごりゅうっ♥♥

「をっひいっ♥♥♥」

せめて受精を防ぐことで、試合に負けても勝負に勝とうとしたミコト。

だが最後に子宮を抉られ、『避妊できている』という確信が大きく揺らぐ。

(ヤバい♥♥ ウソ♥♥ こいつのちんぽ♥♥ おちんぽっ♥♥ スゴすぎっ♥♥  
避妊しても関係ないっ♥♥ 何しても孕まされるっ♥♥ このおちんぽで孕んじゃううううっ♥♥♥)

体験版はここまでです。続きは製品版で！